

「訪中を終えて」 青木菜々恵

日中友好協会さんが主催してくださった青年団に参加できてとても貴重な体験をできたと強く実感しています。実際に自分と関わりのあるところでの中国を今回は感じられて良い意味で印象が変わりました。

最初に行く前の状態について少し述べます。私は今まで中国という国について、教科書に載っていること程度の情報しか持っていない、行く前の中国人の印象はあまりよくなかったです。地元の三井アウトレットパークには多くの中国人が観光客として来ます。その方々は全身にブランド物を身につけて、大きな声で話します。また、中国という国については習近平総書記のもと、共産党による色々な取り締まりが行われているため、「習近平の独裁政治」のような少し怖い国のイメージがありました。

実際に訪中して、中国について日本人はよく理解せずに、あまり良い印象を持っていないということを感じました。私もそうでしたが、中国についての知識が薄いのに「中国人はマナーが悪い」や「中国という国は生きづらそうだな」などの先入観を知らぬ間に植え付けられていて決めつけてしまっていたなと思いました。また、行為を日本と中国の文化の違いも考慮して見てみると気付くこともたくさんありました。例えば、日本で出される飲み物は冷たいのが普通であり、特に炭酸飲料はぬるい状態で出されることはまずありません。中国での食事ではどこでも常温のスプライトとコーラとジャスミンティーでした。これも文化の違いです。訪中団員の1人が教えてくれたのですが、お腹を壊さないために常温で出すことが心遣いだと聞いて、事実かどうかは分かりませんが、行為だけを見るとわからない文化の違いを実感することができました。逆に、私の場合は、トイレトペーパーを流してしまってトイレをつまらせてしまうことがありました。日本では普通のこと中国では迷惑をかけることになってしまい、日本に来ている中国人も同じように知識不足や習慣の違いにより、客観的に見ると「マナーが悪い行為」をしてしまうこともありそうだなと思いました。

今回のスケジュールで印象に残ったのは、多くの世界遺産をまわられたこと、中国人学生と交流できたことの2つがあります。元々、高校時代に世界史を専攻していたこともあり、今回、中国国内の有名な世界遺産をいくつかまわられたことはすごく興奮しました。写真で認識していたものを自分の目で認識することは感動に値するものだったし、実際に見るとどれも壮大で、中国のスケール感の違いを感じました。2つ目の土曜日に行われた北京城市大学の学生さんとの交流会では、花琳さんという日本語を学んでいる学生さんと仲良くなりました。共通の趣味があったことから意気投合して、いろいろ会話を楽しむことができました。中国の学生さんに関わって感じたのは、日本の学生は自国について無知すぎるのではないかということです。私は文化や政治など、日本について自分の意見を聞かれても答えられないと思います。中国に行って、交流をしたことで、さらに自国について興味が湧きました。これも一つの良い収穫であると感じました。

最後になりますが、本当に今回このような貴重な機会をくださりありがとうございました。日本で行われる日中友好協会の行事にもぜひ参加したいです。機会があれば、またよろしくお願い致します。

「国際交流の意義」 上杉蒼

2019年12月20日から始まった、日本青少年代表団の5日間の訪中に、私は大変運よく参加することができました。中学3年生だった4年半ほど前に、一度中国を訪れたことがあった私は、この5日間で、中国が以前の訪中時よりも発展した姿をたくさん見ることができました。その例を挙げると、レンタル自転車、無人販売機、キャッシュレスの発展、顔認証システム、モバイルバッテリーの貸し出しなど日本にはない魅力的なシステムがたくさんありました。

私が今回の訪中で意識していたこととして、「中国政府からの多くの支援によって、自分たちの訪中が叶った」ということが挙げられます。支援をしてくれていることは、私たちの訪中に投資をしてくれていることでもあります。しかも、中国の学生ではなく、日本の学生に。「きっと、投資するからには中国側に何かしらのメリットがある。できるならば、それに答えたい。」そう考えた私は訪中前、その理由を見つけようと心に決めました。そして、実際に行ってみて感じたことは、「近い未来を創っていく私たち大学生が、中日の友好関係を築こうと思うきっかけ、また実際に築いていくことに対する期待値に投資してくれているのではないか。」というものでした。これは、人民大会堂で行われた、日中大学生千人交流大会に参加した時に、特に強く感じました。

そのうえで、私が日本に帰国して考えたことは、「なぜ、友好関係を築くことが大切なのか」ということです。もちろん、喧嘩するよりは仲がいいほうが圧倒的に幸せです。また、戦争がなくなり平和を願うことを疑うつもりもありません。しかし、日本政府も含めた、日中両政府がここまで尽力しているということは、それ以外にもメリットがあるはずだと考えました。そして調べてみると、いくつかのメリットが挙げられました。1つ目に、経済的交流の促進。2つ目に、異文化理解。3つ目に、異文化理解による自国や地元への理解や愛着の促進。この3つが主な日中交流のメリットとして挙げられ、中国政府は経済面をとても重視し、日本政府は自国への理解促進を重視していることが分かりました。以上の結果からどのように考えるでしょうか。「お金重視の中国より、愛のあるように感じる日本がやっぱりいいな。」と考えて、終わってしまっているのでしょうか。私は、日中交流とは、この差異をどのように考えるのが重要ではないかと思えます。経済的な交流を念頭に置き、より明確な目標を持った中国の経済市場は日本を大きく上回っていますし、愛国心に関しては、そもそも中国に日本は敵いません。もちろん、両国の政府には、日中交流に関して、私が知ることでできない考えがあると思えます。しかし、「互いをリスペクトし、互いに学びあう。」両国の若者がそのような視点を

持って交流していけば、多少、社会の波が変化したとしても揺るがない信頼関係が築けるのではないのでしょうか。

最後に、今回の訪中で、私がこのような考えを持つことができたのは、今回が2度目の訪中であり、1度行ったことのある国で新たな学びをしたいと思えたからだと思います。このような貴重な機会をくれたすべての方々、またこの訪中により出会えたすべての方々に心から感謝申し上げます。

「私が感じた中国の魅力」 岸本花音

今回、中国人民対外友好協会様・中国日本友好協会様のご招待の元、北京研修に参加することで、たくさんの学びや気づきを得ることが出来た。まず、この機会を与えてくれた中国人民対外友好協会様・中国日本友好協会様・公益財団法人日本中国友好協会をはじめとする関係者方々に感謝を伝えたい。

19日から始まった今回の研修は、搭乗予定の飛行機が欠航になり、個人的には、最悪なスタートとなった。そのため関西空港への到着が遅れ、事前研修に参加出来なかったのだが、班員のメンバーとはすぐに打ち解けることが出来た。今回の研修が有意義なものになったのは、班員に恵まれたことが大きいと思う。

5日間で、様々な観光地を巡り、中国の歴史や文化を学ぶことができた。特に印象深かったのは、万里の長城と人民大会堂だ。万里の長城では、ビル100階分にも及ぶ階段を登った。あまりの苦痛と寒さで、道中何度も諦めそうになったが、友人と励まし合いなんとか頂上にたどり着くことが出来た。頂上から見た景色は言葉に出来ないほど美しく、一生忘れがたい達成感を得た。毛沢東の「長城に到らざるは好漢に非ず」という言葉を胸に、初心を貫く粘り強さを大切にしたいと思った。

また、今回の研修で、普通なら一生足を踏み入れることが出来なであろう、人民大会堂で日中大学生千人交流大会に参加するという貴重な経験が出来たことは本当に光栄だった。初めて目にした人民大会堂の厳かな雰囲気にも圧倒されるとともに、今回の研修がいかに貴重なものであるかを改めて実感した。沢山の日本人と中国人が集まり、人民大会堂を埋め尽くしている光景は、なんとも言い難い感動を覚え、日中関係のますますの発展を心から願った。

今回の研修で学んだことは、つながりの大切さだ。今回の研修では、沢山の中国人と触れ合うことが出来た。今回で2度目となる中国訪問だが、訪れるたびに、現地の人々の温かさに胸を打たれる。優しい中にも芯を持つその姿に憧れさえ抱くほどだ。また、今回の研修に共に参加した日本人の仲間とも、強い絆を結ぶことが出来たと思う。中国人は、縁をとっても大切にしよう。例え長い間会っていない友人でも、久しぶりに再会した時には"老朋友"として歓迎してくれるのが中国人だという。私も、今回の研修で結んだ縁を大切にしたい。そして、これからも新たな出会いを大切に生きていきたいと思う。

日本には、中国に対して良くないイメージを持っている人がまだまだいる。今回の研修に参加していた仲間にも、参加前は怖い国だと思っている人もいた。だが、そんな仲間たちも、今回の研修で中国に対するイメージが一変したと口をそろえていた。実際に、自らの目で中国を見て、中国人と関わることで、その魅力に気づいたのだ。だから私は、北京で感じた感動や想いをいろいろな人に伝えていきたい。そして、一人でも多くの人に中国の魅力を伝えていけたらと思う。

「行動してみることの大切さ」 小泊奈緒

まず、なぜ私が日中友好協会を通じて訪中したのかというと、今まで留学や海外ボランティアなどで訪れ、その国について肌で感じ学んでいました。しかし、中国は国土も広く、どこに何があるのか全く知りませんでした。「いつか中国に行きたい」と思いながら残り少ない大学生活を過ごそうとしていました。その時、大学から「中国に行きませんか？」と誘われました。とても貴重な体験ができると思いきうちに返事をさせていただきました。

私の中の中国のイメージは、「広く」「物価が安い」「キャッシュレス」「PM2.5が濃い」などニュースで見たイメージや今まで行ったことのある中華圏の国から連想するイメージばかりでした。また、私は中国語が話せないのが不安もありました。しかし、実際に中国に行ってみると、空気が澄んでいました。PM2.5はなく、マスクもすることなく4日間過ごすことができました。中国でも北京は先進していると知っていたため、どのような街並みなのか興味がありました。街並みはビジネス街の風景でしたが、一つ一つの建物が大きく、また真四角な建物ではなくユニークな建物が多いと感じました。夜になるとお店の看板が目が開けられないほど眩しく光っているお店などもあり、見るだけでもとても楽しかったです。お店に入ってみると、時間を持て余していた店員さんは携帯を触っていたり、他の店員さんと話していました。これらは日本ではありえない光景です。日本は繊細な国であるため、携帯を仕事に携帯を触っているだけ不快になったりします。それが日本のいいところでもあります。それが反ってストレスになっていると思います。中国の店員も他の海外の店員もずっと携帯を触っているわけではなく、きちんと仕事もしています。メリハリを作れば、日本が行っている「働き方改革」も変わってくるのではないかと思います。

訪中の中、『中国版 WeWork』である『Ucommune』に訪問をさせていただきました。Ucommuneの建物もですが、他の建物もフォーマルな建物ではなく、少しユニークな建物がありました。Ucommuneの建物に入ってみると、多くの会社が入っていました。オープンにしているため、他の企業と意見をシェアできるように壁はスライド式のホワイトボードや会議室には会議中なのかわ

かるようにスモークが出てくるように工夫がされていました。また社員が休憩できるようにカフェや仮眠スペースがあり、快適に仕事ができそうでした。Ucommune の社員にお話を聞くことができ、ある学生が「起業したい人に企業が投資する条件は何ですか?」という質問をされていました。社員さんは第一に「人柄」だとおっしゃっていました。利益など先のことを考えず、起業したい人の人柄を優先して投資することが多いようです。今回多くの大学生が「起業してみたい」と思っている学生が多くいました。しかし、日本の投資家は先のことを考えて投資するかしないかで決めるので、若者の突発的なアイデアでの企業は難しいと思います。今回の企業訪問のおかげで学生らもいい影響を受けたのではないかと思います。

4 日間の訪中で感じたことは、「一生味わえない体験」をしたと思いました。私は 4 年間、大学内の友だちとしか関わってこなかったの、いろんな県の大学生に出会い、たくさん話ができたので自身の考えがアップデートすることができました。また、人民大会堂に入れたことは奇跡だと思いました。人民大会堂を見ることはあっても中に入って式典に参加することは想像もつきませんでした。今回の訪中に参加しなかったら私の人生にはなかった体験でした。訪中に参加したことは軽い気持ちでした。こんな軽い気持ちで参加したにも関わらず、とても貴重な体験をしたことは今後の人生にも役に立つものだと思います。『フツ軽』という言葉が生み出されたように、いろいろなことに挑戦していきたいと思いました。

「中国で見た(日本)の姿」 小宮青空

「治安は大丈夫なのだろうか?」

今回の訪中団への参加が決まった際、一番に思ったことである。

11 下旬、私は大学からの訪中団へ参加案内のメールを受け取った。1 万円で中国へ行けるらしい。せっかくの機会だし行ってこようかな。こんな軽い気持ちで応募し、大学からの推薦枠の一人となった。大阪で行われた事前研修会では、各々がどんな意識や目標を持ち訪中団に参加しているのかを知った。自分は大学からの推薦枠から参加した身であったが、ほかの人たちは面接等を受け明確な意識や目的をもって参加していることを知り、自分も何か「意識」や「どんな視点を元に中国の実情をとらえるか」を決めないと思った。

バスで移動の際の添乗員の方のお話は、北京の実情を知ることができひと時も聞き捨てならないものであった。いつも冗談を交えながらおもしろおかしく語ってくれる話の中に、時折貧しい人たちの暮らしや治安の悪いところの話が盛り込まれ、中国経済の「リアル」を感じた。また、バスの中からの光景もとても新鮮なものだった。北京の経済発展の象徴ともいえる高層ビル群とともに視界に入ってくるのは、橋の下でひっそりと隠れているよう掘っ立て小屋に住む人々の姿。目まぐるしく変わり、移り行く中国経済の外で、まるで時が止まっているかのようにひっそりとたたずんでいる姿に、「昔の中国」のイメージを思い起こされた。道路を進む車は高級車、特にセダン車が多いことに気が付いた。それらはどれもスモークがかけられており、中が見えない仕様になっていた。車メーカーの販売戦略の結果なのか、あるいは監視カメラ社会が生み出した嗜好が反映された結果なのであろうか。日本とは比べものにならないほどの監視カメラや、オービスの数。本来こうあるべきなのか、はたまた日本が安全すぎるだけなのか深く考える機会となった。

北京市にある大学訪問では、職業訓練校の立場にある学校を視察したが、日本の学校にはない規模の施設や最新の設備にはとても驚いた。ただ知識を身につけ就職活動に臨むのではなく、専門知識を身につけなければ中国社会で生き残るのは厳しいのだという現状を感じた。大学生との交流もあり、話していると「日本が好き」という想いを熱く感じた。アニメが好きという大学生の話で話題にあったのは「ONE PIECE」「BREACH」「NARUTO」だった。(やはりこの辺の有名どころが人気なのか...)と面白い発見があった。日中交流が本来の目的であったが、その前にはやはり日中交流が重要となってくる。自分たちのグループは和気あいあいとしており、すぐに皆打ち解けあうことができた。また、現地では他の班の人たちとも仲良くなることができた。連絡先を交換したり、同じ県の大学生と友達になり一緒にご飯を食べに行ったりと今でも交流が続いている。この面も、日中訪問の特筆すべき魅力だと感じた。思い返してみると、初めの研修会で「日本と中国を比べる」ことはあまりよくないと言われた。実際に訪れ、街の景観や人々、スーパーなどの店員さんの対応など「日本と比べて~だな。」と比較して考えることが多かった。しかしそれでは異文化理解につながらないと気付いた。自分たちを基準に物事を見るのではなく、「これがこっちの当たり前で文化的なのか」の視点を持つことによって様々なことが面白く感じた。この考えの重要性は、日本の社会や企業内においてもあるべきなのではないかと思った。他者に対して余計なことを言わず、理解し尊重する姿勢が日本人には足りていないと改めて気づいた。中国にいながら、日本の社会についても考えさせられることとなった。

自分でプランを立て、航空券やホテルを手配し同年代の人との交流を持たせることは非常に難しい。今回のプログラムは何から何までいたせりつくせりで、日中友好協会の方々や添乗員の方には本当に感謝している。最後に、日中友好協会の方々のお仕事は、真のやりがいあるものだろうなと思った。

「訪中を通じて得たこと」 齋藤美唯那

私は、今回日中友好大学生訪中団に参加した。隣国である中国に多少の興味はあったものの、実際の応募動機はとにかくどこか海外に行きたかった、普通では考えられないような値段で海外へ行ける、日本のほかの大学生と会って話をしてみたいなど、中国とはあまり関係がないものであった。私はこれまで日本人として生きてきて、中国と日本は密接に関わっていることを学んでいたが、普段生活をしているなかでそのように感じたことは少なかった。だから、自分のなかで中国は遠い存在であり、他国とその点に関して大差なかった。また、私は中国に対してこれまであまり良いイメージがなかった。日本で報道されている中国に関するニュースは、マイナスなものが多いように感じていたためである。日本にいと中国に対してプラスのイメージを持つことは難しいように思う。

この訪中団を通して中国に行き、現地の中国人学生と交流したり、様々なことを実際に見たり聞いたりするうちに、中国のイメージが大きく自分の中で変化していった。世界遺産である紫禁城ではその大きさ、広さに驚いた。日本ではありえないその規模に、中国がいかにかに大国であるかを実感した。中国人学生との交流では日本語学部の学生ということもあり、日本が好きで中国人がたくさんいて驚いた。中国人は想像以上に親切で優しく接してくれた。

中国人学生と交流するうちに、勝手に中国人は怖いと思っていたイメージが崩れた。歓迎会で同じテーブルになった北京の学生と仲良くなった。今回の出会いを無駄なものにしないよう、定期的に連絡を取りたいと思う。さらに人民大会堂では、中国と日本が友好を進めている様子を学んだ。人民大会堂に入ったとき、私たちは凄いところに来てしまったかと圧倒された。軽い気持ちで中国に来たが、日本の代表として招待されて訪中していることを痛感した。日中青少年交流のビデオを見たりしたこと、日本と中国は昔から密接に関わりあって互いに協力して歩まなければならない関係であると学んだ。これまで遠い存在であった中国が自分のなかで一気に身近な存在になり、私たちのような若い世代が友好を進めていく必要性を強く感じた出来事であった。

今回の訪中を通して、私はたくさんのことを学んだ。中国に来なければ、中国がいかにかに大国であるかも日本と関わりが深いこともわかってはいても、実感することはなかっただろう。それだけでなく文化的な面でも多くのことを学ぶことができた。中国の世界遺産を訪れたが、観光地であるにもかかわらず英語表記が少ないことに気がついた。ほとんどが中国で書かれており、中国は自己第一主義の風潮があるわかった。またこれは行く前にわかっていたことだが、政府の力で LINE や Instagram、Facebook 等の使用の禁止をすることができることに驚いた。そのほかに、中国で値切りを体験したが日本にはない文化で面白かった。

非常に多くのことを学び、中国のイメージが大きく変化した訪中であつたと思う。訪中を終えてもっと中国を知りたいと考えるようになった。この訪中を通じて日中交流はもちろん、日日交流もできた。同世代の学生と触れ合い、たくさんのお話をしているいろいろな刺激を受けた。今回のような素晴らしい体験ができたことは、日中友好を進めようと努力している方がいるおかげであることを忘れず感謝したい。私は青少年代表団の一員としてこの経験を大勢の人に伝えていき、日中友好を深める責任があると考えている。この責任をこれから十分に果たしていきたい。

「訪中してわかったこと」 坂本 萌

私が今回の大学生訪中団に参加した主な理由は、中国に関する情報を、自分の目と耳で直接得ようと思ったからである。日本に住んでいる限り、日本のメディアは中国に関してとても限定的な、しかも負の情報を流しているように感じていた。加えて、同じ東アジアに位置する国同士で、お互いの国の良い所とそうでない所を理解し合うことが必要であると思っていたためである。

主な訪中日程は以下の通りである。12月19日(木)では、関西空港近くのホテルで研修会を行った。20日(金)には関西空港から出発し、北京空港に到着。昼食に北京料理のレストランへ行き、午後は古き北京に関する展示をしている首都博物館に行った。21日(土)には北京城市学院航天城キャンパスを訪問し、現地の大学生と短い時間ではあったが交流した。交流内容は班ごと違い、私の所属していた班では中国ならではのボードゲームをした。午後は天安門広場と故宮博物館に行き、中国の伝統的建造物を見ることができた。その日の夜、長富宮飯店内で歓迎会が行われ、わたしたち長野県立大学の学生はパブリカを披露した。中国の代表学生は、伝統舞踊や日本ならではのオタ芸を披露していてとても面白かった。22日(日)には、念願の万里の長城へ行き、約30分間険しい階段が続く万里の長城を堪能した。午後は、天壇公園へ行った後、近くの百貨店でショッピングをした。一緒に行動していた友人がショッピングで値切り交渉を楽しそうにしていたのが印象的である。23日(月)には、若者の企業関連施設を見学し、中国の先進的なベンチャー企業の様子を見ることができた。午後は、人民大会堂で行われた日中大学生千人交流大会に招待され、出席した。この千人交流大会は、今回の訪中団が初めての参加であったという。滅多に入れないという人民大会堂に入った時は感動した。24日(火)には、北京計画展覧館へ行った。20日に行った首都博物館とは対照的で、近代的な北京の展示を行っていた。午後に北京空港から日本へ帰国し、関西空港に隣接したホテルで一泊し、長野に帰ってき

た。

以上が、主な訪中内容であったが、今回、この訪中団に参加することができて本当に良かった。他大学の学生含め、総勢 180 人の学生が中国に訪問したが、私は長野県立大学代表として参加し、とても意義深い経験をさせていただいた。北京市は、中国の首都であるために町はきれいに整備されていた。毎日、中国に関する話をバスガイドさんが面白おかしく話してくれた。そのなかでも印象的だったのが、数年前から習近平主席は、北京市は世界の首都となるために環境改善に取り組んでおり、大規模な工場は他の省へすべて移転したという話である。そのため、私は訪中前に一番危惧していた大気汚染は全くなかったといってよい。このように、自分の目で、耳で中国に関して様々な情報を得ることができ、今回の訪中の目的が達成できて本当に良かった。

また、今回の訪中によって改めて他国理解について考え直すことができた。日本に住んでいる限り、他国に関する情報は制限され、少ない情報源のみでその国のことをわかった気になってしまう。しかし、社会情勢が変化するようにすべての国は人が住んでいる限り変化し続ける。そのことを念頭に置いて、これからも他国と日本とのよりよい在り方を考えていく必要があると思った。

最後に、今回このような大学生訪中団として中国を訪問する機会を与えてくださった日中友好教会のみなさまには感謝しきれません。本当にありがとうございました。

「魅力的な中国」 佐喜真尚吾

2 回目の中国であったが、毎日新たな発見や中国を肌で感じることができた。以前大連に行ったことがあったが、北京は大連とは大きく異なっていた。政治の中心であり、首都であるため、賑やかでありながらも派手すぎない街であった。また、天安門広場や天壇公園、万里の長城などまさに中国らしい場所を訪れた。一番印象に残っているのは人民大会堂であろう。初めての人民大会堂はとて大きく、インパクトが大きかった。日中大学千人交流大会では日本人の学生 500 人と中国の学生 500 人が一堂に会し、我々が日中友好の架け橋となり、これからの時代を担っていくのだという実感が大きくわいた。大学で中国語を勉強し始め、徐々に中国の友人もでき、中国の文化や国自体に興味を持つようになっていたが、自分が日中友好の役割を果たす実感はあまり感じなかった。しかし、中国に日中友好を目指す学生が多く存在し、日本にも同じように望む仲間が存在すると知り、自信が湧いてきた。これまで日中両国は歴史的に深くつながり合い、お互いに学び合ってきた。これから新たな時代に入り、より一層日中両国がお互いに協力し、良い関係を構築していくことが重要である。

今回の派遣で北京の街、特に歴史関連施設を見ながらまだまだ知識が足りない点が多くあった。今後中国語学習を続け、中国と関連した仕事をしたいと考えている私はそのような歴史の知識を学ぶことでより中国を理解できるのではないかと考えた。中国 4000 年の歴史には膨大で美しい文化、遺産が残されている。故宮の博物館では多くの美術品に心を奪われた。また、それと対比して現代の急速的な経済発展も非常に興味深い。4 日目の企業見学ではオフィスの貸し出しというこれまでになかった新しいビジネスの形、電子支払い、顔認証での施設管理など正に中国の技術発展がすごいスピードであることの象徴であった。それまで日本のメディアを通じての情報で技術では日本が勝っていると思い込んでいたが、その認識にとらわれてはこの流れに取り残されていると感じた。すぐに新しいものを吸収し、競争しあう中国の経済発展は凄まじい。国内での規模も大きいため、今後は中国を視野に入れたビジネス展開が必要になってくると感じた。

今回の北京派遣は非常に忘れがたいものになった。北京、更に発展していく中国のエネルギーを肌で感じた。また更に、訪中団の中で同じように中国に興味を持ち、中国語学習を継続している仲間と出会えたことは非常に大きな収穫といえるだろう。それまで大学で中国語学習を続けながらも同じような境遇の仲間は少なくモチベーションも下がっていたが、同じように興味を持っている仲間が存在し、彼とお互いの意見や中国語学習法などを交換し合うことで中国語学習意欲が鼓舞されるとともに、より中国に興味を持つようになった。今回の訪中団で初めて出会い、数日間過ごしただけであったが、強い繋がりが生まれた。今後中国と関わっていく中で必ずどこかで出会えるような気がした。

今回の北京派遣は日中両国にとって友好的な関係の 1 歩であるとともに、個人的にも忘れがたいもので、より中国に関心を持つものであった。このような機会に恵まれとても嬉しく感じ、より今後の活動に生かしていきたいと感じた。

「百聞は一見に如かず」 柴崎 友里

これまで中国の文化や人物に一切興味がなかったわけではない。大学にいる中国人留学生は日本人学生よりも勤勉であり、その点を常に見習いたいと思っており、また中国本土に関しては急速に進む社会発展、積極的に新技術を取り入れる文化、特にキャッシュレス決済に関してなぜ日本以上に発展したのかについて興味はあった。しかしいつの間にかネット上やメディアの情報から自分の頭の中で「中国ってきっとこんな国なんだろう。」というのが出来上がってしまっていた。実際に訪中してイメージとのギャップに驚かされた。私は今まで 6 つの国に訪れたことがあるが、中国はこれまでで一番印象が変わった国であった。

私が今回の訪中で感銘を受けた点は大きく分けて 2 つである。1 つめは設備の充実性である。北京城市学院を訪れた際、文化体験の前に学内の一部を見学した。私たちが見学した実践棟は撮影スタジオやレコーディングスタジオ、ニュース番組風の放送スタジオがあり、普段講義で習ったことをすぐに実技で行えるということに深く感動した。別のグループの学生によるとこの専攻の実践棟だけではなく、法学系の実践棟でも、実際の法廷のようなセットがあったらしく、この大学が座学ではなく実際に社会に出た際に習ってきたことを活かすことが出来るかという点に重きを置いているというのがよくわかった。実際に学長が最初に卒業生が現在いかに現場で活躍しているかについてよく話していたことに関しても、実際に現場で習ってきたことを実践できるかという点を重要視しているということが見て取れた。

2 つめはキャッシュレス決済についてである。日本よりもキャッシュレス決済が発達しているとは聞いていたものの、私の予想をはるかに超えるほど流通していた。例えば、おじさん一人がやっている小さな屋台でも、店名の看板にキャッシュレス決済用の QR コードがあり、買い物客がその QR コードを読み取って言われた値段をスマホで打って決済していた。また、シェアオフィスの企業見学をした際、社内に飲み物やスナックが入った仲が見える冷蔵庫のようなものがあった。一見、日本でもよく見られるような機械に見えたが、この「便利蜂」は社内にいる社員のみしか使えないように普段はロックされている。社員が便利蜂内の商品を買おうとすると、キャッシュレス決済アプリにログインすることによりロックが解除されて、冷蔵庫のドアが開く。そして、商品を取り出すと自動的にどの商品を取り出したのか認識されて、その商品の決済画面が自動的に表示され、ユーザーはその決済ボタンをタップするだけというものだ。これはキャッシュレス決済が日本よりはるかに発達した中国ならではのサービスだなと思った。そして実際に中国を訪れたことによりキャッシュレス決済が中国で発達したのかという背景までわかった。今回、ほとんどの学生がレジで現金で支払っていたがその際店員は一枚一枚紙幣が本物かブラックライトを当てて確認していた。このことからキャッシュレス決済が偽札使用防止にも貢献していることがわかった。

今回の訪中は日中交流だけではなく、日日交流も盛んにできたと思う。きっとこの訪中がなければ出会うこともなかった日本全国から集まった学年も専攻も異なる学生と期間中中国に関することをはじめ、将来自分はどうなりたいかなど普段なかなかできない真面目な話までした。今回の訪中をきっかけに出会えてよかったと思える学生ばかりだった。

そして今回様々なところに訪れたり、経験が出来たのは中国政府がすべて費用を提供してくれたということを忘れずに、これからもっと私と同じくらい世代の人々が、中国に興味を持ち、日中友好がより良い関係の社会になれるよう自分も今回の経験を多くの人に話したり、日中友好に関するイベントに参加するなどして日中友好に貢献したい。

「北京で感じたこと」 谷口正樹

日中青少年交流推進年である 2019 年に大学生訪中団として北京に行くことができたことは、日中友好を願う私にとって非常に光栄なことであった。私は中国へは過去に計二回行ったことがあり、毎回中国は様々な姿を見せてくれます。今回の北京への訪中もまた新しい一面を見せてくれました。

まず私が感じたことは中国人の優しい一面です。日本では在日中国人の犯罪のニュースなどがよく流れ、それだけを聞いていると私たちはまるで中国人はそういう民族であるという印象を持ってしまいがちです。しかし、実際は優しく日本に対して友好的な気持ちを持っている中国人は多いように思います。今回の訪中の中このようなことがありました。私が北京城市学院で象棋を体験しているときのことで、象棋をするのは私は初めてで、最初先生が象棋のルールを説明してくれましたが、いまいちルールがよくわかりませんでした。そこに一人の中国人学生がやってきて、ルールについて質問をすると本当に親切丁寧に一つ一つの駒の動き方や戦略やコツなどを中国語や英語を通して教えてくれました。さらにその学生は専攻は英語でしたが、第二外国語として学んだ日本語を片言で話そうとしてくれました。こんなにも友好的に交流しようとしてくれることに私は感動しました。このようなことはほかにもいろいろありました。いずれも言えることは日本に対して友好的な気持ちを持つ中国人はいるということです。中国の総人口約 13 億 8000 万人です。これは日本の人口の約 11 倍です。つまり、悪い人の数も日本よりも多いかもしれませんが、良い人だってその人数いるということです。悪い印象というものはやはり先行して人々の頭に記憶されますが、決して悪い人だけではないということを、われわれ日本人はこの先中国と関わっていくうえで知っていかなければならないと思いました。

もう一つ感じたことがあります。それは歴史を大切にしていこうとする中国の姿勢です。私は上述したように過去に二回中国へ行ったことがあります。行った場所は上海、西安、武漢です。いずれの場所もその歴史を大切にしており、発展とともに消えていくようなことにはならないように様々な工夫を行っていました。それは北京でも同様でした。私が初めて北京の街並みをバスから見たとき、非常に違和感を感じました。なぜならその場所がとても静かだったからです。北京は今まで行った場所とはまた違う荘厳な雰囲気があり、首都としての風格を感じさせるような場所でした。バスガイドの方の話によると、政治・歴史の町として存在する北京では、その風格と昔の街並みを維持するために、路上の店舗を禁止したり、高層ビルの制限を設けたりしているそうです。私はこの話を聞いて非常に感心しました。中国は現在 GDP 第二位の経済大国です。そうであるからにはきっと首都北京も素晴らしい発展を遂げており、近未来的な場所になっていると思っていました。しかし経済が成長しても、昔の街並みを大切にしていこうとする姿勢に、私の中国への印象はかなり覆されました。

このように私は今回の訪中を通して、様々なことを経験し、多くのことを考えました。中国という国は非常に近い国であり、歴史

的にも経済的にも日本とは切っても切り離せない関係にあると私は考えています。しかし残念ながら、今の日本には中国に対し昔のままのステレオタイプを持ったままの人が多くいます。さらに私たち同世代の中でも、日中関係が悪化していた時代にテレビでニュースを見た影響で、中国に対しネガティブなイメージを持っている人が少なからずいます。私はそのような人に対し、「今の中国を見てほしい」と伝えたいです。百聞は一見に如かずとはまさにそうであり、実際に見なければわからないことが多くあります。そして日本人に対してだけでなく、中国人に対しても同じように訴えたいです。そのために今、学生のうちにもっと中国語を勉強し、いずれは日中友好の懸け橋となって、日本中、中国中を駆け回りたいです。

「自分の知らない世界」 西橋美月

今回、私が中国を訪問したのは初めてで、外国に行ったのも初めてでした。中国と日本は古代から多くの面で歴史や文化を共有しており、互いへの影響が非常に大きい隣国です。そんな中国ですが、日本人が持っている中国に対しての知識やイメージは、メディアや周囲の日本人などによる一方的な情報によって作り上げられているところが多く、「実際の中国」とイコールとは言えません。私が思うに、日本では中国に関して悪いように伝えられことが多く、その悪い印象が独り歩きしているように思います。そしてそれは、歴史や政治的な背景に依るところが大きいと思います。しかし、私は大学生になって中国人の友達を持ったこと、そして今回中国を訪問したことで、中国に対して持つ視野がより広くなりました。実際、私も中国人の友達ができるまで、中国や中国人に関して、「マナーが悪い」「清潔ではない」「日本に対して攻撃的」などというマイナスなイメージに支配されていたのが事実です。その問題は、真偽がどうであるかではなく、マイナスなイメージばかりが独り歩きして、良い側面には目が向けられなくなり、中国があるマイナスなイメージで一括りにされ語られてしまう点にあると思います。そもそも、もし仮に私たちが持つ悪い印象が真であったとしても、ある文化に対してそう簡単に優劣をつけられるものなのか、疑問に思います。異国を見る際、「良いところもあれば悪いところもある」ということ、そしてその良いか悪いかを判断する基準はあくまでも主観に基づく、ということをご心得おくべきだと考えるようになりました。私は価値判断をすることなく、「この文化はこういう文化なのだ」とありのままに捉えることで、自国の文化と違った文化が存在するということが面白く、また興味深く思えるようになりました。

このように考えられるようになったのは、実際に中国人の友達を持ち、そして今回中国を訪問したことに依ります。訪中前に、どなたかが「百聞は一見に如かず」と仰っていましたが、実にそうであると今回の訪中で実感しました。メディアから与えられた限定的な情報により、頭の中で誇大化していた中国への固定的なイメージは、実際に中国現地を訪れたことによる圧倒的な情報量を以って崩れ去り、以前よりも広い視野で中国を見ることができるようになりました。何よりもまず、中国人の友達を持ったことで、国も何も関係ないと思えるようになり、そして国と国との政治的問題と、その国の人々や文化は切り離して考えるべきだと思うようになりました。確かに、過去から現在までの日中関係は、綺麗な言葉ばかりで綴られるようなものではなく、両国ともに関係改善のための課題が多く残されていると考えます。だからこそ、このような民間交流が日中関係改善のために大きな役割を果たす、と今回の訪中を通して実感しました。

また、他に印象に残っていることとして、北京の名所旧跡を訪れた際の、特に故宮博物院の壮大さには圧倒されました。日本ではまず見られないような広大な敷地に建つ立派なお城、そしてそれを支えるだけの文明や文化が隣国に存在していたということに、驚きを覚えました。それは、中国の歴史が古く長いということは知識としては知っていましたが、それを実際に目にして、自分の予想をはるかに上回っていたためです。中国の歴史的遺産を見たことで、自国の文化が古くからどのように中国の文化に影響され、逆に相違している点はどこにあるか、など他国との比較を通して自国の文化を知ることへの興味が芽生えました。

このように、今回の訪中によって、中国への見方は大きく変わり、ある国を見るときにステレオタイプ的に判断するのではなく、まず「本当はどうなのか」と考える視点を持つことができるようになりました。また、今回の訪中で中国の全てを知った訳ではありません。広大な中国のなかで、2019年に北京という都市の一部を、5日間という短い期間で見ただけに過ぎません。このように、自分の知らない世界がまだまだあると知れたことは、自分の中国、そして外国への興味がより一層強いものになりました。最後になりますが、このように視野を広げる機会を与えてくださった、日中友好協会の皆様方には本当に感謝しています。

「私が訪中した意義とは」 堀愛美

私がこのプログラムに参加した目的は大きく分けて3つあります。1つめに、私は世界中に友達を作りたいという夢があり、その一歩として中国にも友達を作りたいと思ったことです。今まで一度も中国に足を踏み入れたことがなかったので、ぜひ行ってみたいという興味本位で参加しようと決めました。2つめに、自分一人では行くことのできない場所に行き、一人では知ることのできない知識を多く取り入れたいと思ったことです。旅行や観光で中国へ行っても知ることのできない情報を、ガイドさんや現地の大学生との関りを通して学びたいと思いました。そして3つめに、本場の中華料理の味を試してみたいと思ったことです。中華料理は、日本でも人気で、日本でも簡単に食べられますが、実際に本場の中華料理を食べてみたいと思いました。このような目的で参加を決めたこのプログラムを通して、私は様々な貴重な体験をさせていただきました。その中でも特に3つのことが深く心に残って

います。

まず初めに、21日の夜に行われた歓迎会が心に残っています。まず、会の始めに中国側、そして日本側の会長さんたちからのお話をいただきました。すごく貴重なお話をしていただいたように感じました。この日中友好協会にとっても長い歴史があること、この協会が見つないできた絆は数知れないこと、私たちは日本の学生の代表として、そして私は長野県立大学の代表として中国にいることを認識させられました。また、多くの中国の方々がこんなにも私達日本人を歓迎してくれていることに感動しました。日本の文化を知ってくれて、パフォーマンスしてくれている姿、日本語を話してくれる姿、写真を取ろうと言ってくれる、連絡先交換してくれる、日本が好きだと言ってくれる、日本に留学すると言ってくれる姿など、想像のはるか上をいくような中国の方たちの立ち振る舞いに驚きました。たしかにニュースや地図でみたら日本は中国と密接に関わっていると感じます。しかし日本にいと、政治面や経済面、環境面などについて日本と中国はお互いに認め合う部分が少ないような情報を手にすることが多いと思います。だから実態を知らないのに中国を、中国人を嫌いという人がいたり、日本人が中国へ行ったら攻撃されると思っている人がいたりするのだと思います。しかし、実際にあのようなあつい歓迎を受け、こんなにも中国に住む人と日本に住む私たちが強い絆で結ばれることができるのだと、胸が熱くなりました。実際に体験しなくてこのような思いをすることはできなかつたと思います。本当に、嬉しかったです。

2つめに、22日の国会議事堂への訪問が心に残っています。個人の観光では決して足を踏み入れることのできない場所に行くことができたことにとっても感動しました。そして、私たちと同じくらいの年齢の学生や、私よりも小さな子どもたちが自分たちの強みを舞台の上で一生懸命パフォーマンスしていました。本当に凄かったし、格好良かったです。そして、そこで聞いた中国側の代表のあいさつで、日本と中国がここ2年間でより密接に関わりあう関係であるということを知りました。2020は東京で、2022は北京でオリンピックが行われます。そこで私たちができることは、ただその現実を真に受けるというだけでなく、この機会を活かして日中の友好関係をより一層深めることだと思いました。スポーツの力は偉大です。自分がオリンピックに出るわけではないけれど、日本と中国のお互いが満足いく形でオリンピックの運営ができるように、私たち学生が率先して日中の間の橋を築くべき人材であると感じました。そしてその日、その目標を達成するための第一歩を踏み出させてもらった気がしました。自分が実際に日本と中国の架け橋となれることを実感し、努力したいと思うようになりました。

そして3つめに、私はこのプログラムにおいて、日本の学生同士の交流を深くすることができたことに大きな意義を感じました。中国に対するイメージ、実際の体験に対する感動や感情は本当に人それぞれであると感じることができたからです。特に、いっしょに色々な場所にいたり色々な料理を食べたりしたときみんなの反応がすごく心に残っています。ひとつのものを見たり聞いたり体験したりしただけでも美味しいという人もいれば、苦手という人もいて、凄って思う人もいればふーんと思って流してしまう人もいて、その状況を近くで見ることができたことが、すごく大切な体験であったと思いながら毎日過ごしていました。ここで私が感じたことは、一つのものに対して、こんなに十人十色の意見を持つことのできる私達だから、きっと日本にいて、中国に関するひとつの同じ情報を受け取ったときも、人それぞれ違う意見が生まれるのだろうなということです。実際見たわけではないのに中国の環境問題や、日中関係に関するニュースを聞いて、中国に対して悪いイメージを抱いてしまっている人もいれば、中国いいよねって思っている人もいます。だから私は、日本人の学生との交流を通して、中国に対するちょっとマイナスな固定観念をもっているような人達に本当の姿はそうじゃなかったよ、私はこんな体験をしてこんなふうに思ったよっていうことを伝えていきたいと思いました。そしてそれが、私が訪中に参加した意義であると感じました。私が何人かにこの体験や感じたことを伝えることで私の周りの人からその周りの人のもつ中国に対するイメージを良い方向に変えられると感じました。

ニュースなんてニュースじゃない、リアルが、現実が、自分の体と心での体験が一番大事です。この訪中を通していろいろなことを学び、そして感じましたが、そのどれもがわたしの心に深く残っています。自分が期待していた何百倍も刺激的な体験をさせていただきました。またいつか自分の力で、中国を訪れたいと思います。

「中国の魅力～様々な中国文化に触れて～」 松田理沙

今回の訪中を終えて、これからの自分の人生において多くの刺激を受けることができた。私は今回が初めての訪中であつたため、何もかもが初めての経験であつた。私は中国人に対して、良く言えば、意志が強く自分を持っている、悪く言えば、一方的できつい性格をしているというイメージを持っていた。しかし、実際に中国人と接してみると、優しい人もたくさんいることが分かった。スーパーで買い物をし終わり、班の人たちがいるところに向かおうとしたとき、どこから行けばいいかわからず周りを見渡していたら、ほんの数秒の素振りであつたにもかかわらず、スーパーにいた方が出口を教えてくれ、その優しさに心が温まった。日本にも多くの外国の方がいるが、日本人から話しかけに行くことはめつたにないだろう。異国の地でそんな時に素早く道を教えてもらえたら、その人は日本人の優しさに感動するに違いない。私自身とても嬉しかったし、見習うべき点であると思った。しかし、良い印象ばかりではなく、百貨店で買い物をしているときに、店員に引張られて蹴られそうになっていた学生を見て、日本では見ない光景だつたためとても驚き、暴力はありえないと思った。そして、このような一部の人の行動で、中国人は暴力的などといった悪い固定概念が植え付けられてしまい、悪影響であると思った。これはどの国に対しても言えることであるため、「人のふり見て我がふり直せ」のように、日本人も気をつける必要があるということ学んだ。

私が今回の訪中で心に残った体験は3つある。一つ目は歓迎会である。私たち長野県立大学は「パブリカ」を披露した。食事の席で私の隣に学生さんが座り、日本語で頑張って話してくれたのがとても嬉しかった。そして私も中国語で会話ができるようになりたいと思った。発表することを伝えたら、「頑張って」と言ってくれて少し緊張が和らぎ、発表も無事終わった。準備期間は短かったけど一年生とも仲良くなることができとても良い経験になったと思う。

二つ目は万里の長城である。昔から万里の長城に行ってみたく、この訪中でその夢が叶い感動した。結局何メートルまで登ったのかは分からなかったが、かなり上のほうまで登り、きれいな景色を見ることができた。様々な国の人がいて、世界遺産による経済効果を感じたと同時に、降りるときに膝が痛くなり衰えを感じた。

3つ目は人民大会堂で行われた日中大学生千人交流大会である。人民大会堂には普通は入ることができないため、非常に貴重な体験となった。それぞれの国に向けた日中の学生のパフォーマンスは、どちらも力強く美しいものであり、このような機会を通じて、学生の手で日中の友好関係を築くこともそう難しくはないのではないかと思った。

その他にも、企業見学では中国の技術の進化やフリーダムな企業の良さを感じることができ、博物館や広場では、古き良き中国の文化に触れることができた。ただ旅行をしに来ただけでは絶対に出来ない体験を5日間ですることができ、参加してよかったと心から思う。また、学年や学校の垣根を越えた日々交流もでき、いろいろな話も聞けてとてもためになった。実際に中国を訪問して、コンビニや小さいショップなどで買い物をする際に英語がほとんど通じなかったことに驚いたとともに、中国語に対する学習意欲が湧いた。すでに中国語を話せる学生が複数いたため、私も中国語を学び、会話ができるようになりたいと思った。訪中する前には知らなかった中国の魅力を存分に知ることができたため、微力ではあるが、私も自分の周りに広めていこうと思う。

「認めること」 三橋なつみ

わたしは以前から、中国を一度で良いので訪れてみたいという願望があった。そう思い始めたきっかけは、わたし自身も固定観念を強く持っていたことにある。日本のニュースで流れるのは、中国に対して悪いイメージを持たざるを得ないものばかりだったため、中国は日本とは違う、積極的に離れるべき存在だと思っていた。歴史的に見ても友好な関係を長く築いていない、というのはもちろん、とりわけ中国は日本の真似ばかりするという印象が強かった。

それが大きく覆ったのが、この五日間だ。北京の街並みが初めて目に入ったとき、本心で、未来都市かなと思った。そのくらい、経済的に発展したことを象徴するようなビル群、交通、流通システムがあった。建築物をバスの中から眺めるのは移動中の楽しみのひとつだった。日本よりはるかに芸術的で、首が疲れてしまうほど見上げる必要のある建物ばかり。次回、北京を訪れるときはただただ街を眺めていたい、とも思う。この時、夏にした中国の友人との会話を思い出していた。彼女は、「日本は遅れている。中国はもっと便利な暮らしができるよ。」と話していたのだ。聞いていて、夏のわたしはまさか、と思った上に、中国の実態を知らないことにも気が付いたのを覚えている。友人の話題が出たが、中国人のイメージを周りに聞いてみると、なんとなく怖い、なんとなく悪い、なんとなく、、、という意見が多かった。この、“なんとなく”は何処からやってくるのか。メディアなのかはたして長年かけて日本人のなかに植え付けられた考えなのか、定かではない。しかし、変えてゆく必要があるのは確かである。この数日、わたしたちが嫌な思いをするような対応をした方は一人もいなかった。毎食、とても楽しい時間を過ごしたレストラン。一度にこれほど大勢のお客さんを迎えて、セッティングするのだけでも大変なはずなのに、従業員さんたちは協力的に(たまに聞こえてきた言い合いの言葉も含めて)コース料理を次々と運んできてくださった。飛行機で隣に座った方には画面の操作方法や映画の見方、アナウンスの内容を教えていただいた。その方は日本語を全く話せないのにもかかわらず、コミュニケーションを取ろうとしてくれたのだ。

北京の方の人柄に助けられた場面はたくさんあるが、今回の素晴らしいツアーはわたしたちのバスのガイドを担当くださった左さん無しでは語れない。観光先ではもちろんのこと、バスの中では実際に北京に住む方からしか聞くことができないことを多く知ることができて、とても興味深かった。結婚、環境問題、経済格差など、日本と共通している課題を抱えていたりもした。政府があれこれ提言していることについての市民の生の声を聞くことができた気がした。環境問題は、日本でもよく話題となっている。外から見たら国境なんて存在しない、とよく言われたものだ。近隣国として、協力的な姿勢をみせていくべきだ。すべて振り返っても、左さんによる笑えて、そして考えさせられる、ガイドは最高だった。

これから、少しずつでも中国での経験を周囲に伝えて、そして自分の周りに日中友好に理解のある人が増えていくことが今のわたしの一番の願いだ。

「訪中を終えて」 村田裕樹

まず、私が日中友好協会の団員として中国に行こうと思った理由から話そうと思います。私が中国に行こうと思ったきっかけは大きく分けて2つあります。1つ目は中国自体に興味があったからです。中国については、学校の地理や歴史の授業でやった程度であまり知識はありませんでしたが、ニュースや新聞などで日中関係があまり良くないことや日本人がもつ中国人に対する印

象があまり良くないことは分かりました。自分自身も中国に対する印象はあまり良くなかったです。買い物するときには中国産の物は買わないようにしたり、中国人の言うことはあまり信用しなかったりと中国に対しての偏見がすごかったです。2 つ目は 1 万円で行けるからです。5 日間の中国訪問で 1 万円はかなりリーズナブルだと感じました。それにただ安いというわけではなく、世界遺産見学や中国の大学訪問など日頃経験出来ないようなことも出来ると聞いていたのですぐに応募を決意しました。

次に実際に行ってみての感想ですが、まず友達が出来たことがうれしかったです。しおりが配られて自分の班のメンバーを見た時は 15 人中 9 人が違う大学で固まっていたので、友達が出来ないんじゃないかと不安でいっぱいでしたが、それは杞憂でした。私は人と話すのは得意なほうではありませんでしたが班のみんなが積極的に話しかけてくれて班に馴染むことができました。世界遺産見学や大学訪問もとても貴重な経験になりました。まず世界遺産見学ですが、万里の長城がやはり 1 番印象的でした。こんなに大きなものを 1 つ 1 つ人間が作ったんだと思うと胸にこみ上げてくるものがありました。しかもこれは最近作られたわけでもなく紀元前に作られたと聞いてとても驚きました。次に大学訪問ですが、日本の大学よりはるかに設備が良いと感じました。大学内には生放送をするスタジオがありました。中国文化体験では囲碁将棋の体験をすることになっていたのですが、囲碁と将棋は趣味でやるが多かったためずっと楽しみでした。将棋を実際にしたのですが、日本の将棋とは少しルールが違い戸惑いました。将棋を教えてくださいました。将棋を教えてくださいました。

今回の訪中を終えて、1 番印象に残っていることは今まで自分自身が中国に抱いていた偏見は全てが正しいわけではなかったということです。当たり前のことですが、全員が全員、悪い人というわけではありません。テレビやニュースで抱いた中国に対する印象はがらりと変わりました。また今回の訪中がきっかけで中国語を学びたいと思うようになりました。中国にいる間自分は英語でコミュニケーションをとっていましたが、友達が流暢に中国語を話しているのを見て自分も話せるようになりたいと感じたからです。

最後に、今回の訪中に関わった関係者の方々、他大学の生徒の方々、そして中国で関わってくださった方々に感謝の気持ちを述べたいと思います。

「人生で一番あつという間の一週間」 元井美南海

私にとって、今回の訪中は二度目の海外体験でした。高校一年生の時、初海外でアメリカへ行き、世界を牽引している存在である米国の偉大さをその際にひしひしと感じたのですが、今回の訪中では、その時に感じた国のパワーとはまた違った中国のスケールの大きさを感じました。

まず、19 日の研修会では、全国各地から集まった大学生と果たして仲良くなることはできるのか、とても不安でしたが、私が所属した 4A の皆さんは心から温かく、明るく、楽しい雰囲気であまりから包まれていたので、そのような不安はすぐに吹き飛びました。最初に山岸さんから、この訪中に参加することができなくて涙を流した学生が何人もいて、という話を聞いて、本当に参加できることは簡単なことではなくて、関西空港という場にいられることを心から誇りに思いました。私の大学は三人くじ引きでこの訪中に参加できなかった人がいたのですが、実は私も最初はそのうちの一人でした。中学生の頃から、日本と一番近い関係にあると勝手に思っていた中国に漠然と興味があり、また、漢文が得意だったことから、中国の歴史に実際に触れてみたい、大学では中国語を学びたい、と思っていた私にとって一度訪中の団員に選ばれなかったことは非常にショックで涙を流しきえました。しかし、決定した学生のうちの一人が辞退してくれたため、私は中国に行くことができ、人生のページに残る最高の思い出を刻むことができました。

中国では、世界遺産を三つも見学させていただいて、一つ一つ古い歴史を感じ、それが今も大切に守り続けられていることに感動しました。しかし、万里の長城では、元々あまり体力が無いので、皆と一緒に上の方まで登ることはできず、少し悔しい思いをしました。全部登り切った人は、偉大な人になるに間違いのないと思うくらい、一段一段想像以上に険しかったです。それも大切な思い出です。私が、今回の訪中で一番心に残っていることは北京の大学生との交流です。私は囲碁チームだったのですが、囲碁のルールを私も友人も全く知らず、北京の大学生に聞いたところ、その人も全く知らず、結局三人ですべて日本のアニメについて話していました。目的は果たせなくても、予想外にその学生と仲良くなり、WeChat まで交換し合い、今でも会話を続けていることが出会いはどこに転がっているのか分からないなあと思わせてくれました。日本の大学にはあまり見られないような完備された施設、充実した教室で、一人ひとりのニーズに合わせていると強く感じました。日本の専門学校のような一面も感じられました。また、企業視察では、顔認証や、オフィスの場を提供する、といったような初めて目にするもの・聞くものばかりで頭が追いついていきませんでした。

多くの日本人がどう思っているかは分かりませんが、少なくとも私が思っているよりはずっと中国は日本よりも発展していて、これからの世界の経済を引っ張っていく存在になりつつあるということを実感しました。更に、毎食の中華料理も、行くまでは毎食同じ中華料理、絶対飽きるだろうなあと思っていたのですが、中華料理の中にも飲茶や、四川、田舎の方の料理など、様々な種類があることに驚いたのと同時に、全てが美味しすぎて感動の連続でした。字数が埋まってきてしまったのでまだまだ書きたいことは山ほどあるのですがここら辺でまとめたいと思います。

私は今回の訪中で多くの人に支えられ、助けられ、感謝の気持ちを述べたい人がたくさんいます。まず、いつも一緒にいて、一生懸命に中国、特に北京の身近な生活から遠い歴史まで伝えてくださった左超さんがバスガイドで本当に良かったと思います。

あの皆を笑わせてくれた笑い声、決して忘れません。

また、友好協会の皆様、たった一万円で貴重なんて言葉で済ませられないほど素晴らしい体験をさせてくださり本当にありがとうございました。人民大会堂にはもう一生入ることは出来ないと思います。温かく、困ったときには助けてくださり安心して一週間過ごすことができました。交通費まで支給していただき、感謝申し上げます。また、同じ班員として仲良くしてくれた4Aの皆さん、明るくて楽しい雰囲気从一开始最後まで包まれていた4号車の皆さん、前泊から後泊まで苦楽を共にした、関西発の皆さん、全ての人に感謝を伝えたいです。この出会いは一生の宝物です。私たち若者がこれから日中の友好のバトンを必ず受け継いでいきます。2019年を最高の思い出で締めくくることができました。謝謝。